

総合討論

●コメンテータ

鳥居 高(明治大学)／金子 芳樹(獨協大学)

●討論参加者

舩谷 鋭(立教大学)／伊賀 司(神戸大学)／塩崎 悠輝(同志社大学)／横山 久(津田塾大学)／水野 広祐(京都大学)／
中村 正志(アジア経済研究所)／加藤 剛(総合地球環境学研究所)／西 芳実(京都大学)／山本 博之(京都大学・司会)

コメント 1

鳥居 高

明治大学

ぜんぜんデータを分析せずに今日の話だけ聞いてコメントするという大胆なことをしています。

今回はっきりしたことは、BNという仕組みにさまざまなところでほころびが見えてきているということなので、まずはBN体制と、BN体制の議会政治とはなんだったのかについて少し整理しておきたいと思います。

■ BN体制を支える五つの前提

——憲法上の枠組みと選挙制度の特徴

私は五つの前提があったと理解しています。まず、①「憲法におけるマレー人優位の取り決め」があります。二つめに、本来は議会でイシューにしなければいけないことを「センシティブ・イシュー」として議会政治の枠組みから外してしまうということで、②「議論できない議会政治」が前提にあります。

あとの三つは今日の議論で出てきたことです。まず、③そもそもごく単純な小選挙区制度である。死票が多いという問題です。次に、④半島部、サバ州、サラワク州という三つの政治空間に分かれて、かつ、山本さんがていねいに説明してくださいましたが、サバ州にはたしかに半島部の政党が入りはじめていますが、基本は地域政党、つまり、半島部マレーシアを舞台にする政党、サバ州を舞台にする政党、サラワク州を舞台にする政党がある。そして最後に、⑤マレー人に有利な選挙区割りです。BN体制には、このような二つの憲法上の大きな枠組みと、選挙制度としての三つの特徴があります。

前者の①と②は変わっていません。今回噴出した問題は、単純な小選挙区制度の問題と、マレー人に有利

な選挙区割りの問題です。この五つを前提にしてBNがこれまでなにをしてきたかという、最初の対応として、マレー人が都市住民になってきたので、クアラルンプールとスランゴール州の一部でゲリマンダーを敷きました。いろいろな表現の仕方があると思いますが、ある意味で、「議論ができない議会政治」あるいは「マレー人優位の基本的な取り決め」を大前提にしているので、「抑制された民主主義体制」だったと言えるのではないかと思います。

■ 選挙民の「記憶の政治」が抑制された民主主義体制を機能させていた

これがなぜ機能していたかという、私自身は証明できないのですが、理由は二つあると思っています。2008年の選挙の時にもこの話をしましたが、一つは「記憶の政治」という話です。そのときは1969年の話しかしなかったのですが、先ほどの篠崎香織さんのLot 10の写真がきわめて象徴的ですが、中国系の若者たちが外へ出て意見表明をする、あるいは「政権を替えよう」という話をする。これまでは、中国系の住民たちには1948年から1960年までの時代の記憶が強くありました。「万が一マレーシアでなにかあると我々中国系がスケープゴートにされる。だからきわめて慎重に動かなければいけない」という人たちがだんだんいなくなってきました。

これは、伊賀司さんの説明から言えば、若者たちが選挙民になってファースト・ボーターが増えてきたという話と裏返しになると思います。つまり、制度もあるのですが、それと同時に選挙民にもいろいろな「記憶の政治」があり、ある意味で「抑制された民主主義のルール」の下でこの国は動いていたのではないかなと考えています。

■ マレー人の地位向上に伴う経済構造の変化が「民族の政治」の機能低下を招いた

それと同時に、皮肉なことですが、なぜこの仕組みがうまくいったかという、「マレー人ってなに」、「イ

インド人ってなに」、「中国人ってなに」ということが可視化されていたからです。つまり、もともと「そういうことをやめよう」ということで新経済政策が始まったわけですが、民族というものの区分けが経済機能とともにはっきりしていた。だからこそ、実際には政党が民族政党というかたちをとっていた。ところが、現在はそれが見えにくくなっている。

これはどのようなことかという、私は「都市圏」あるいは「都市」という言葉は使わないほうがいいと思っていて、「首都」、「首都圏」だと思っていますが、首都圏を見るかぎりでは、まるきりマレーシアが変わってしまったということです。豊かなマレー人が目の前をうろろろしているし、一晩で事業で大成功するビジネスマンが出てきています。

もう一つ重要なのは、これまでマレーシア経済の下支えをしていた民族グループの下に、外国人労働者というグループが入ってきていることです。製造業、建設業の現場のみならず、いま増えているのはミャンマー人です。都市部へ行くと、ミャンマーの人たちがものすごくたくさん働いています。

経済機能で民族の区別がついていて、それを政党政治というかたちで制度化していたものが、マレー人の地位が向上して経済構造が変わったことによって逆に見えにくくなってきています。それがなにを意味するかという、従来の民族間での争点が見えにくくなってくるし、それを吸い上げて民族の政治にすることが機能しなくなってきているのではないかという印象をもっています。

■ 多様な情報が溢れる「首都圏」の政治と

コーヒー・ショップ・トークが続く地方の政治

そうすると、なにを見るのか。ここは伊賀さんと一部は同じで、一部は違います。少し話を大きくしてしまいますが、「東南アジア」とか「マレーシア」、「タイ」、「インドネシア」というかたちで政治が話せるのか。マレーシアでは、とくにクアラルンプールを中心とした地域が一つの国のなかで完全に突出してしまっています。去年、ペナンに少し行ったのですが、ペナンもたしかに都市化しているのですが都市化のレベルがぜんぜん違います。情報や消費水準などが、クアラルンプールはシンガポールと、場合によっては東京とつながっている世界になってしまっています。バンコクもこの首都圏の政治に連なります。東南アジアは現在、「都市と地方」ではなく、「首都圏」だけが突出して動いています。そうすると、そこで展開され

る政治と地方での政治とは違うのかなと思います。

これは西芳実さんの話とも重なりますが、前は政治などのいろいろな情報はどこで流れていたのか。インドネシアと最も違うのは、マレーシアは小さいということです。人口は2,600万しかいません。象徴的なのが「コーヒー・ショップ・トーク」で、いろいろな話がコーヒー・ショップで語られます。あくまでも喩えとしてコーヒー・ショップ・トークと言うのですが、フェイス・トゥ・フェイスでいろいろな情報が流れます。そういう世界で政治がまだ続いているのが今回の選挙での「地方」なのかなと思います。だからこそ、UMNOが従来型のある意味でバラマキで、「生活の面倒をみますよ」という政治が機能する。かたや首都圏では、コーヒー・ショップ・トークで流れていたことがフェイスブックで流れている。

中村正志さんのコメントだったと思いますが、新聞に「マレー人世界と華人世界とに分かれる」と書かれていたと言っておられた気がします。それは少し見方を変えると、首都圏を中心として動く政治のロジックと、地方というものが変わってきたのかなと思います。データをさわっていないので勝手なことだけ言っているのですが、今回の選挙ではいわゆる首都圏以外の選挙区でどのようなになっているかという分析をていねいにしてみたいと考えています。

■ 新経済政策で変わった社会・経済構造が政治の仕組みとのあいだに齟齬をきたしている

二点目は、華人社会の問題です。先ほどMCAの話をしました。1990年代に教育、いわゆるリムーブ・クラス(kelas peralihan)の改革があり、高等教育や大学も増えたとし、中華人民共和国との往来も自由になりました。そのようななかでMCAは、これまでは中国系が抑えられていたがゆえに「我々の権利を」ということで与党連合のなかで意味をもっていた。それがマハティールによって、あるいはUMNOによって、マレー人の手でどんどん自由化が進むことで、MCAは存在意義を失っていくのかなと思います。

先ほど休憩の時間に中村正志さんと話をしていて、「2008年選挙のときに言っていた話と同じことを言わないといけませんね」と言われました。今日の話でぜんぜん出てこなかったことは経済の変化です。GDPで言うと製造業が30%ぐらいで止まっていて、現在はサービス産業がものすごく広がっています。経済構造自体も大きく変化して、その一方で1990年から民間の大学をどんどん認めたから、私立大学卒の人たちが

ワースト労働市場に出てきています。このあたりのことも少し見ていかないと見誤ることになるのかなと思います。

現在の私の結論としては、マレーシアの新経済政策の下で進めてきた社会構造の変化や経済構造の変化が、新経済政策を実質的に政治で支えていた仕組みとのあいだに齟齬を来しはじめていて、このような選挙結果になってきているのかなと感じています。

*

山本さんから三つの論点が出ていますが、私は2点目についてだけ山本さんと意見を異にします。二つ目の論点の「連邦制は実質化するか」について、資料には「半島部では州の権限はきわめて限定的であり、中央集権に近い統治が行なわれてきた」とあります。たしかにそうなのですが、やはり州には土地、水、森林、宗教といった権限が与えられている以上、かならずしもそうは言えないと思います。この論点に関しては私はニュアンスが違います。

コメント 2

金子 芳樹

獨協大学

私も特別な準備ができませんでしたので、今日の6人のお話を聞いた範囲で頭に浮かんだことをいくつか述べようと思います。

■ 得票率と議席数が上下を繰り返す傾向が崩れた2013年総選挙

まず、今回の選挙の結果については、基本的に、政権交代が起らなかったという意味では現状維持となったわけですが、長らくこの国の政治史を見てきた者、1959年の最初の選挙から見てきた者としては、一つ注目すべき変化があったと思います。それは中村正志さんが紹介してくれた資料にある、過去の総選挙における「与党連合（連盟党／国民戦線）の議席占有率と得票率の推移」という部分です。

得票率と議席占有率の格差があることは今日何回も出ましたが、おもしろいことに、資料18のジグザグした、つまり、得票率と議席数が上がったら次の選挙

では下がり、下がったら次の選挙で上がるというかたちは、両者がまったくバラレルの状態で一貫しています。しかも2013年の今回の選挙以外で、ジグザグが崩れた回は1990年に1回あるだけです。

その法則からいえば、1990年の総選挙ではBNの得票率と議席数は上がるべきところだったのですが、実際は下がりました。1990年の選挙は、ご存じのようにUMNOが決定的に分裂していた政治状況を反映した選挙でした。マハティールの政権基盤もいまひとつ安定せずにUMNOを割ってラザレイと闘っており、BNの本家本元がぐらついた状態にあった特殊な選挙でした。今回の選挙では、その過去に1回しかない特殊なケースと同様の動きが起りました。

■ 華人票をほとんど取り込めずとも勝利するBNの手強さ

マレーシアの総選挙でジグザグ現象が起こる一つの要因は、先ほど鳥居高さんがおっしゃったBNに埋め込まれているシステムの一つで、一回落ちたら次の回に持ち直させる安定化システムがビルトインされているからだと考えています。先ほど塩崎悠輝さんから「(これまでの選挙で)PASの得票率はほとんど変化がない」というお話がありました。では、このジグザグを形成する要因になっていたのは何かというと、華人の得票率が続けて落ち込んだり、上がり続けたりしないようなバランス機能が発揮されてきた点が大いだと思います。

今回それが崩れたのは、華人のウェーブが本来なら行きつ戻りつするところを行ってまみになってしまい、それこそ津波のように大きなうねりになったからだと受け止めています。その意味ではこれまでにない動きです。これをどのように考えたらいいのかについては、先ほど華人の投票行動について話がありましたが、そういうことだろうと思います。

ただし、私としては「それでもBNが勝つんだな」と逆に感じました。華人の票をほとんどBNに取り込めなくてもまだBNが勝っているということは、中村正志さんが先ほどおっしゃったように、野党からするとなかなか手強いということになるのかもしれない。以上はちょっと感想めいた話です。

■ マレーシアに二大政党制は定着するのか — 対抗軸から考える

ここからは山本さんが提示された論点、とくにこの研究会のテーマにもなっている「二大政党制は定着するか」に焦点を当てたいと思います。すでに何人か